

一般財団法人川村文化芸術振興財団 2021年度 ソーシャル・エンゲイジド・アート支援助成決定!



2021年度助成対象プロジェクト (全9つのプロジェクト)

助成額：30万円～40万円／1件 総助成額：300万円

- キュンチョメ 「そして人類は滅亡した」
- 渡辺 篤 「私はフリーハグが嫌い(アイムヒア プロジェクト)」
- 毒山凡太郎 「プロジェクトF(仮)」
- art for all 「コロナ・オンライン会議」
- 小林清乃 「永い時間と牛飼いの方角、光の声」
- ひととひと 「女が5人集まれば血も割れる」
- マルガサリ 「オペラ・コムニタ・ミカノハラ『きこえぬ声へ』」
- ジェニファー・クラーク／坂本夏海 「ケアの声：Stories of She」
- 釜ヶ崎芸術大学 「誤読・社会的インパクト/釜ヶ崎オ!ペラ 呱呱の声をあげる～目的のないコロシアムの活動をむすぶ社会との対話実践」

一般財団法人川村文化芸術振興財団(理事長 川村喜久)では、日本初となるソーシャル・エンゲイジド・アートに対する支援助成事業を2017年に開始。コミュニティや社会にコミットし、地域社会や住民とともに制作や活動を実施し、より良い社会モデルの提示や構築を目指す日本国内で実施されるソーシャル・エンゲイジド・アートプロジェクトに対して助成しています。

4回目となる今回2021年度は公募と審査を経て、日本国内外69件(海外14件、国内55件)の応募の中から9件のプロジェクトが決定しましたので、下記の通りご案内いたします。

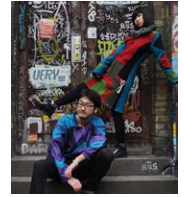
2021年度は、現在の新型コロナウイルス感染拡大の状況を鑑み「コロナ禍におけるソーシャル・エンゲイジド・アートプロジェクト」をテーマとしたプロジェクトのアイデアを募集しました。選ばれたプロジェクトは、コロナ禍でのコミュニティの在り方、原発事故の現在、ジェンダー、社会的弱者、マイノリティ等をテーマとして取り上げる多様な9つのプロジェクトが採択されました。2021年度は助成対象の当該プロジェクトを実施するためのプロトタイプ(事前ワークショップ、試作、レクチャー、映像等)を発表していただきます。



そして人類は滅亡した | キュンチョメ

女性たちと『人類の終わり/人類の滅亡』を考えていくプロジェクト。社会変革を考え実践している人、マイノリティ、社会的弱者を支援している人、学者、詩人、占い師など、様々な立場の女性と対話を行い、そこから導き出された各々の考える『人類の終わり』を、予言の書として一冊の本にまとめる。神話や創世記などを書き記してきた者の多くが男性であった点に着目し、未来や恐怖を語ることを許されてこなかった女たちによる『人類の終わり』を書き記していく。

キュンチョメ：ホンマエリとナブチの男女二人によるアートユニット。自らの嗅覚と欲望に従って国内外各地に中長期にわたり滞在し、その土地の最もコアな現実に切り込んでいくスタイルで活動している。



私はフリーハグが嫌い (アイムヒア プロジェクト) | 渡辺 篤

フリーハグは「FREE HUGS」などと書かれたプレートを掲げ、知らない誰かと抱き合う行為。コロナ以前、渋谷駅前でそれを見かけない日は無かった。私はフリーハグが嫌い。コロナ以前も以後も孤立し続ける存在がこの世界には一定数居る。ひきこもりと呼ばれる人々。私はそこに行き、ハグをしたい。彼らの多くはフリーハグをしたことない人ばかりだろう。しかし、きっとこの企画になら参加してみたいと思う人が集まる予感がある。

渡辺 篤：神奈川県生まれ。2009年東京藝術大学大学院修了後、足掛け3年ひきこもりを経験し、現代美術家として社会復帰。2020年横浜文化賞文化・芸術奨励賞。主なプロジェクト展は2021年「同じ月を見た日」(R16スタジオ、神奈川県)等。



プロジェクトF (仮) | 毒山凡太郎

新型コロナウイルスによって、他者との予期せぬ分断を強いられた我々は、より一層他者と親密になり、密な空間を訪れたいと強く望むようになった。一方、東京電力福島第一原発に近い一部の地域でも、区域内に自宅がある/あった知人は元の場所に戻りたいと今も強く望んでいる。予期せぬ分断は我々を他者と、被災者を土地とより親密になることを意識させた。本プロジェクトでは、分断を経た身体が再び親密さを取り戻すとき、進化した身体の獲得を見つめていく。

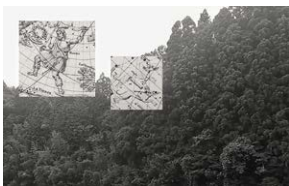
毒山 凡太郎：2020年 Sustainable Sculpture (Komagome SOKO、東京)、個展 SAKURA (LEESAYA、東京)、2019年 あいちトリエンナーレ2019：情の時代(四間道・円頓寺、愛知)、六本木クロッシング2019：つないでみる(森美術館、東京)、個展 東京計画2019 Vol.1：RENT TOKYO (Gallery αM、東京)



コロナ・オンライン会議 | art for all

1980年代以降、個人主義化する美術分野は、職場環境の悪化、貧困化、セーフティーネットの不在などの大きな問題を内在化させてきた。さらに新型コロナ感染拡大により、この問題はさらに深刻化した。本プロジェクトは従来の労働組合とは違う、新たなネットワークのあり方を探る。活動は主にオンラインで、アーティストの活動のノウハウに関する公開勉強会やオープンディスカッションなどを企画、日本の美術に携わる活動環境が広く見直されるよう展開したい。

art for all：art for allは2020年のコロナ禍において、文化的・芸術的な営みの一つひとつが尊重され、芸術分野の生態系を損なわずに、さらなる活力がもたらされることを目指して集まった美術に関わる個人からなるプラットフォーム。



永い時間と牛飼いの方角、光の声 | 小林清乃

原子力発電所の事故から十年を迎えるにあたり、放射線にさらされた大地とヒトと動物との関係性について、天体の運行の視座から、新たな神話、または神話が生まれるための仕掛けを創作する。すでに起きてしまった未曾有の現実を少しずつ捉えなおす機会をつくる。そして、廃炉後十万年という行政機関が設定した核廃棄物の保有期間を託さざるを得ない未来の人びとに向けて、儀式的ワークショップを通じて、永い時間に渡り、伝承しつづけるための試みを興する。

小林清乃：アーティスト、東京在住。現代の人々、忘れ去られた者、失われたものたちのコトバ(沈黙も含め)と協同して、無数に存在する認識や語り等を表舞台に召喚する。主な展覧会は、戦時下の若い女性たちの手紙を朗読する交響作品「Polyphony 1945」(資生堂ギャラリー、2019)。



女が5人集まれば皿も割れる | ひとつひとつ

本プロジェクトでは「対話を伴った展覧会」を行う。新型コロナ禍のような非常事態時にジェンダーギャップのある社会構造の中で真っ先に切り捨てられるのは立場の弱い女性達である。本プロジェクトはこのような普遍的な社会問題であるジェンダー問題を「私の問題」として捉え、自らの経験を起点として作品化し展示することで鑑賞者とともに問題を共有し、プロジェクト参加者(鑑賞者を含む)が自らの言葉を見つけていくことを目的とする。

ひとつひとつ：2017年6月コレクティブ「ひとつひとつ」結成 内田百合香、工藤春香、神谷純栄、高橋ひかり、JinYeowool(内田百合香は2020年3月に脱退)、2019年10月公開勉強会with meeting#2「ジェンダーとアート、表現の自由について」登壇者：嶋田美子氏(アーティスト)等に取り組む。





オペラ・コムニタ・ミカノハラ『きこえぬ声へ』|マルガサリ

京都府木津川市賀茂町瓶原地区住民とともに2年がかりでコミュニティ・オペラを制作を計画し、本プロジェクトはその初年度に当たる。この地区は過疎化が進行し、小学校が廃校の危機に直面しているが、本プロジェクトと同様の活動として過去3年間に実験的な「影絵芝居」「ダンスパフォーマンス」「映像作品」の制作に取り組んだ結果、移住者が増加するなど、アクティブなアート実践が集落の風景と住民の意識を大きく変えつつある。

マルガサリ：1998年に大阪にて創設されたジャワ・ガムランを軸とする合奏団で、古典から実験的な作品まで幅広いレパートリーをもつ。インドネシア芸術大学ジョグジャカルタ校と連携しながら、「コラボレーション」をキーワードとした活動を中心的に展開してきた。



ケアの声：Stories of She |ジェニファー・クラーク / 坂本夏海

東北地方の女性達の生活について研究する本プロジェクトは、女性達と共にアート作品とケアにまつわるストーリーの協働制作を通じ、周縁化された声や「見えない」問題を可視化させる試みである。国境を越えたコミュニケーションを通じて、オーラルヒストリーを超えた対話や考察、そしてケアの新たな関係性を構築し、他者を肯定し、想像するための空間として展覧会、実験映画、そして2ヶ国語で出版するアーティスト・ブックの制作を行う。

ジェニファー・クラーク / 坂本夏海：Dr. ジェニファー・クラークはスコットランド（アバディーン）を拠点とする人類学者、アーティスト、キュレーター。坂本夏海はスコットランド（グラスゴー）を拠点に活動するビジュアル・アーティスト。



誤読・社会的インパクト / 釜ヶ崎オ!ペラ 呱呱の声をあげる～目的のないコロシアムの活動をむすぶ社会との対話実践 | 釜ヶ崎芸術大学

18年の活動をつづけるコロシアムの「誤読・社会的インパクト評価 呱呱の声をあげる～目的のないコロシアムの活動をむすぶ社会との対話実践・かたくるしくなく概論と対話」講座参加者とチームを作り、実践研究を行い、プロセスそのものを公開していく。そして、学びのなかからとらえたことをアーティストや参加者とともに「釜ヶ崎オ!ペラ4」という表現行為とする。

釜ヶ崎芸術大学：2012年より大阪市西成区釜ヶ崎でスタート。「学び合いたい人がいれば、そこが大学」として、地域のさまざまな施設を会場に、天文学、哲学、美学など、年間約100講座を開催中。近隣の高校や中学校への出張講座を行う。



審査会の様子(2020.11)

◎審査員

- 工藤安代 (NPO法人ART&SOCIETY 研究センター 代表理事)
- 窪田研二 (インディペンデント・キュレーター)
- 近藤健一 (森美術館キュレーター)
- 相馬千秋 (NPO法人芸術公社代表理事、アートプロデューサー)
- 高嶺格 (美術家、多摩美術大学 教授)
- 毛利嘉孝 (東京藝術大学大学院 国際芸術創造研究科 教授)

※各審査員より審査について所感が寄せられています。
詳細は当財団のウェブサイトにてご覧頂けます。
http://www.kacf.jp/data/news_doc/20210202182216_601919c8d1919.pdf

一般財団法人川村文化芸術振興財団 ソーシャリー・エンゲイジド・アート支援助成について

一般財団法人川村文化芸術振興財団は、文化芸術により人々の創造性や表現力を育み、よりよき社会の構築を目指すために2017年2月15日に設立されました。当財団は優れた能力を有する芸術家に対し活動を支援し、これまで培われてきた文化芸術を継承、発展させ、独創性のある革新的な文化芸術の創造を促進することを目指します。本助成事業はコミュニティや社会にコミットし、地域社会や住民とともに制作や活動を実施し、より良い社会モデルの提示や構築を目指す国内のソーシャリー・エンゲイジド・アートのプロジェクトに対して、毎年採択しています。助成対象は門戸を広げて年齢・国籍不問とし、海外からの応募も積極的に受け付けています。

◎本事業へのお問い合わせ

〒101-0021 東京都千代田区外神田 2-15-2 新神田ビル 3F
TEL: 03-5295-2120
FAX: 03-3526-2292
公式ウェブサイト <http://www.kacf.jp/>
E-mail: info@kacf.jp

3月中旬に助成対象者への贈呈式を予定しております。

詳細が決まりましたら当財団HPにて発表いたします。